

男の子われ兵役免除のかなしさに衝たれやま
ざり兵おくるたび

國のため爲すすべもなしせめてもに飼葉を刈
ると母と伴れ立つ

草刈れば露にぬれけり晝ながら峽間をぐらく
こほろぎの鳴く

汲みたての嗽ひの水の齒に泌みて厨の隅にひ
びくこほろぎ

秋ぞよき節の歌をすがしめばかそかにすだく
晝のこほろぎ

ふるさとへ母と文かく夜を深みこゑひゞき鳴
くえんまこほろぎ

山下谷甚一君應召（一首）

つはものに召し出だされし友どちのたくま
しき肩をたのもしと見つ

燒跡復興（一首）

友が家もつぎ／＼建てば家もたぬわれはす
ずろに病をかこつ

防空演習（二首）

防護團の係り今年はわれに來ず病みこやりを
れば氣の落ちつかぬ

洩れ燈する家のあるらしどしよう骨かち折つ
てやれとのゝしる聲す

ある乙女より「兄を征かせて淋しい中にも元氣を
出して刈入れしてゐます」との便りありたれば

兄征きしさびしさは言はず稲刈るとふをとめ
の文に胸ふたがりぬ

兄征けば年ごろながらをとめ子の身なりかま
はず稲刈るならむ

健氣にもさびしは言はぬてふ文も涙ぐみつゝ
書きしにやあらむ

さびしくも心ひきしめ征きし兄の留守まもる
てふをとめをおもふ

東一男君の父君逝く（二首）

父逝きししらせは泣きてたゝかひの場ばに讀む
らむ友をしぞおもふ

あきらめてありつもと頼る子をいまはのき
はに呼びけむぞ父

したゝかに切つて呉れたるコスモスを投入れ
てみぬ信樂の壺に

小菊咲く庭ひとゝろ銀杏の實を干してあるそ
こら明るき

つくろはぬ庭の小菊の伸び伏しつ日ぐせのし
ぐれ降り沈むなり

隙間もる風さへとがめ病床びやうどにこやれるわれぞ
冬ざりにけり

病床びやうどに行火をいけてもらひつゝ虫の音だえし
ことに氣づきし

もの言へばわが病むためのかなしみに觸れむ
を怖れ母と黙もだしぬ

病むわれに仕事の話する友よ母のなげきをひ
そかに怖るゝ

つゝがなくあらばわれとて生活なりはひは安からしめ
むに母よ赦しませ

病やゝよき日つゞけば癒ゆるがに心たのしむ
若さをおもふ

はげまして一人の子ろを征かしめし母靜かに
も歸りて泣きぬ

病床に事變ニユースは聞きゐつゝ看護の母に
言あらゝげぬ

たゝかへる友のたれかれを思へるとき霞まじ
りの雨降りつゝのる

うから等がいくさ話の昂奮に今宵の薪はよく
燃ゆるなり

こがらしに並木のもみぢ吹きとぶや白衣の勇
士ひとりもとほる

甲寅會厄歳参り記念撮影（二首）

さりげなくカメラには入れど病む身さびしこ
の友らみな仕事をもてり

すでにして一人前の友にまじりわが病むゆゑ
のひけめ感ず

あかときを雑木林にしぐれきて落葉をぬらす
音のつめたき

昭和十三年

軍國迎春

迎春の旗は垂れつゝたゝかひに子ろをさゝげ
し門ぞとさせる

つゝましく母と雑煮を食す時し征きたる友を
言に洩らしぬ

病む汝の先に死にたくはなしといふ老いたる
母の言のせつなさ

老母の先にわが死ぬことを怖れひたすらに病
抑へむとする

あゝされどわが病癒えず一日だに母に氣やす
き思ひをさせざる

はゝそはが生涯をかけて守り來し一人子われ
ぞ病みて起ち得ず

今に見よ今に見よとてありへこし十五年はむ
なし病癒えずして

わが病めば時にはさもしきこともいふ母をた
しなめてひそかに泣きぬ

神経痛の徴候ありてふ母ゆゑにわが病臥の安からなくに

母も斯くや泣くことのあらむ病床に夜を更かしつゝ行末をおもふ

私生子の歌へる（十七首）

父にそむき母にたてつく世の子らに名をし宣るべし私生子ぞわれは

うたがふてふことを知らざりし祖父ゆゑにかなしき境遇に母の落ちたる

人の口に乗りにてむかへし母が婿は金を目あての詐欺漢なりき

みごもればすなはちゆすり家を出でし結婚詐欺漢ぞ父といふ奴は

はゝそはがいたづらごとに身ごもりしわれな
らなくに私生子といふ

おしなべて私生子と爲す法律は腑に落ちずし
てむしろ阿房くさき

この身これ父とやらいふその奴の血潮かよふ
か胸くそわるし

父とやらいふ奴の性もかよふかと怖れを持て
ば身をしつゝしむ

父といふ奴は生涯^{ひとよ}を苦しみのかぎり嘗めつゝ
野垂れ死にせよ

私生子てふその名のゆゑに身にうけし世のさ
げすみはいくそたびぞも

ちゝはゝにさからふことを知らざりしてふ母
の素直さはむしろやしき

生甲斐はなき母ながら一人子のわれゆゑにこ
そ生きて來ませし

をみなゆゑ宿命^{きだめ}かなしきはゝそはの頼み一途
にわれにかゝれり

せめてもに母を安めむわれながら運命^{きだめ}はかな
し病みて起ち得ず

唯一の頼りのわれは病みつぎて老います母ぞ
何になぐさむ

起ち得ざる病は持てど母がためこのまゝにし
て朽ちぬべきかは

まかなしき宿命のもとにいまはしき名をこそ
負へり私生子ぞわれは

征地の人に（一首）

寒さむさつゞけば母と話すことみいくさ人の
上にふれゆく

川端盛俊氏に（船員なれば）（一首）

常にかも波のまにまにまかすらむいのちかな
しく思ひやらるゝ

愛兒を失ひませし中谷千代子ぬしに（一首）

さだめごとゝあきらめませとは言ひもしつし
かあれど人のさだめかなしき

米山久子夫人よりの文に「をばさんより」と

ありたれば（二首）

をばさんとみづから言ひて賜びにける文をし
見れば逢ひたくなりぬ

婦選説くひとゝ思へぬやさしさのなかなか今
はなつかしくこそ

日常吟（三首）

掛けかへむ軸もなきまゝ常臥^{ときむ}のわがさびしさ
はきはまるごとし

それぞれに世に出で起^たちし友がこと母の言ひ
ます聞けばくるしき

玻璃戸越し立春の陽のぬくければ病みのいの
ちをせちにわが思^{おも}ふ

新萬葉集（三首）

わが歌の没となりたるくやしさは新萬葉にふ
れざらむとす

新萬葉の新聞廣告を見てゐしがやがてちぎり
て洩かみにけり

新萬葉選者の大家くそくらへわれはわれとし
歌の道ゆかむ

歌壇紛糾（一首）

えらい人ばかりそろひてことごとにいさかふ
ぞをかしわれは歌詠まむ

出征將士を想ふ（五首）

言つよく子を征かしめつ日章旗打ち振る母の
涙を見たり

占め得たる敵の陣地に日章旗高くかゝげて兵
ら泣きけむ

皇軍の征きゆくところ地圖にひく朱線は伸び
て思ひきはまる

激戦のニュースは入りぬかゝるとき友のあま
たも奮ひ起つらむ

激戦のニュースぞ切に友おもふこゝろすなは
ち家族に及ぶ

永病めど鋭ごゝろはまだ失せぬらし事變の記
事は讀みつ昂ぶる

母と二人くらしさゝやかにあり經つゝ戦時の
不況は歎くべからず

日本のみ民ぞわれらこぞり起ち人民戦線派を
し撃つべし

英靈を迎ふ（二首）

國のため神となりまし花さかる故山にかへる
しらほねかしこ

みひつぎにかざりてかなしありし日のすがた
りゝしきこれのうつしゑ

萬歳をとものにさけびて征かせし日かくなる君
と誰かおもひけむ

町 葬（一首）

よそよそしき弔辭にはふれずわがこゝろひた
すら君をおもひみむとす

男を囓ふ（四首）

女買ひ當然といふ奴に言問はむ女房のまをと
こうべなふや否

色里のふるつはものが妻婚びにおもてたゞし
てをとめ欲るてふ

色餓鬼が人目もなげに晝日中藝妓を伴れて得
意氣にありく

女買ひして來た朝の男なり澤庵漬をむさぼり
て喰らふ

山峽の昏るゝに早き苗代田に種かついばむ雀
むれをり

水張田の淺處をえりて雀らの舞ひくだりつゝ
種ひろふらし

苗代の種かついばむほうほうと追へど雀ら高
くは飛ばす

並みたてる木々のあひまゆ水張りし麓田つゞ
き夕あかりすも

應召の永井哀歌兄に (二首)

かねて此の日あるを期して君をゝし召集令狀
承けてさわがす

大君の任のまにまにいでたゝす君を雄々しと
われらかこみつ

嗚呼東一男君 (四月二十日戦傷死) (十首)

君が戦死報する人のこゑ泣くやうちおどろき
ぬ電話のまへに

君戰死てふうからの電話きれてなほ受話器に
ぎりしまゝ佇^たてりけり

征く時し「たのむ」とわが手にぎりしめし君が
力よわすれかねつゝも

征く君をたゞにはげましこれかぎり相見ぬ君
とおもひみざりき

たゝかひに君は死にしとぞくさぐさの春草ば
なは咲きつゞけども

くるしさはつひに洩^しらさず自^しが軍務のみ口ば
しり君死にしとぞ

君逝きしてふその日その時祭禮の獅子舞をわ
れら見てゐたるなり

わかれとて寄せし寫眞かありし日の君さなが
らに笑みさへたゝへて

君のことに觸るゝはさびししかすがに君のこ
と言はぬ一日だになく

たより合ひし友死にてよりたゝかひにしたが
ふ人をせちに歎かゆ

藻谷銀河大人へ（一首）

君がなさけ身に泌む宵の酒ほがひ飲み得ぬわ
れも歌はさらめや

母をおもふ（四首）

十八年病むわれなくばはゝそはもさきはひ多
くありしにやあらむ

病むわれのむしろあらずばはゝそはの身すぎ
安けくあるらむものを

病めばとて吾子のあらずば何をしぞ頼みに生
きむと母泣きたまふ

病みつゞくこゝろせつなさ老母にわがいふ言
のときに荒かり

竹内藤吉氏の書房にて (二首)

パレットにオイル溶く香のにほひつゝ若葉そ
よげる窓のすがしき

描く君の見つむるらしきまなざしを頬に感じ
つポーズくづさず

見つめぬる庭の草むらそよぐときそこはかと
となき風をおぼえぬ

すゝけたる疊にまろび日ざかりの偏頭痛はわ
がたへがたき

日ざかりの氣鬱ひとしほ深まりぬすゝけ疊を
見つゝこもるに

しんかんと眞日照りつくる晝さなかあぢさゐ
の花さゆらぎもせず

捨て種の根につきしらし裏脊戸におもひもか
けぬ瓜の花咲く

捨て種がおのづのびたる裏背戸の金柑瓜は味
よかりけり

電車みな出でゝ行きたる車庫裏の闇のくだち
に月見草咲く

泉丘子姉宅にて (二首)

こゝろからもてなしたまふ君ゆゑにこよひも
長居してしまひたり

わかき妓らさゞめく家のはなやげばこゝろな
ごみつ去りがてな

生垣如木氏を用ふ（七月二十八日逝去）（三首）

氷枕すぐさま溶けるくるしさに君が計報は讀
みつゝもとな

醫師如木住むとおもへばほとゝぎす啼くてふ
能登の山は戀しき

み佛をおもひまゐらすさびしさのこゝろの内
に君も生くらむ

朝の風ときには冷えて木槿垣このごろひらく
花を増しつゝ

かぎろひの夕焼雲や裏山にはや鳴きそろふ茅
鯛のこゑ

月すでにのぼりて溪のうすじめり茅蜩のこゑ
鳴きそろひたり

夕早く風にさゐだつ草かげにふと聞きとめし
秋虫のこゑ

夜のしめりはや庭草におよぶらし馬追ひとつ
鳴きすましつゝ

秋の草生ひしげりつゝおのづからかよふばかり
の道つゞくなり

秋の草ひときはしげることよりぞ小道ひとす
ぢ山に向ひぬ

手を外れしかぼちやのつるは溝をこえて道の
ほとりに花を咲かしぬ

征地に赴く永井哀歌兄へ（五首）

すめろぎのみたてにしあればしがいのちおほ
きいのちとつゝしみゆかせ

つるぎ佩き歌集もちてい征くてふげに日の本
のますらをぞ君は

君がためいのち惜しまぬすがしさは征く日ひ
かへて歌詠めるらし

國のためいのちを捨てにゆく君のおしいたゞ
きぬ薄茶一ぶく

短刀を持てい征くてふうべしこそつらぬきと
ほせますらをの道

應召の大村雲歩君に（二首）

自が身とておろほかにすなすめろぎの大み楯
としえらばれし君

日の本の男の子と生れしよろこびにきほひた
つてふすがしからずや

應召のT君を驛頭に見送りて (二首)

人知れず君を見送るひとあるをはからず見つ
つ胸ふたがりぬ

人知れず泣きて見送るひとゆゑにますらたけ
をも心泣きけむ

事變にうたふ (七首)

國おもふまことの前に何かあらむ征くつはも
のこの面がまへ

たまきはるいのちをこめて聲のかぎり兵らあ
げけむかちどきのこゑを

生死をつきつめておもふ間もあらず兵ら衝き
けむ敵の陣地を

つはものはいくさにはにたつものぞしかお
もふゆゑに病み哭くわれは

國賊とそしりもやせむうべしこそ長期戦下を
わが病みつゞく

みきゝすることのなべてが病むわれをぶちの
めすなりたゝかひの秋

時事講話血をわかせつゝ聞き歸りいきなり床
を敷いて寝ねたり

眼目由尾兄戦死（一首）

いのちにも代へて名惜しむますらをの常とし
は言へ君をかなしむ

伊豆藏節子姉より柿贈られて（一首）

もらひたる柿のつぶら實まくらべにひとつひ
とつ並べひとつひとつ賞づる

コスモスの花はちひさくなりながら秋たけし
風の庭に咲きつぐ

秋しぐれ日ぐせとなりて庭すみにコスモスの
花咲きすがりつゝ

裾あはせに母とし寝ぬるこの夜ごろこゑとほ
しらに鳴きつゞく虫

窓ぎはの柿の枯葉の騒だちて夜ふけひそかに
風わたるらし

病床ゆ眸のゆくところ床の間の軸は見あきつ
つ菊はすがりたる

常臥のわが咳きむせぶこの朝け早霜いたると
ラヂオ告げたり

浪速なるはり半亭ぞ戀しけれ冬近みおもふ水
炊きの味

あそびぬし犬ころ去りてひそかなる枯芝原に
晝日たけたり

冬枯の雜木山原枝越しにひそけく晝の月あり
にけり

ことなかれ主義に生きむとす病み經つゝ若さ
失せゆくこのあけくれを

あきらめとはさびしきものかつゝましく生く
るとふことのほかにおもはず

幾年月貯金もならじ母と子のくらしつゝまし
くきりつめてなほ

短歌偶感（一首）

いたるべきはてしもしらずひたむきにひとす
ぢのみちをひとりゆかばや

佛をおもふ（十五首）

しみじみと厭離捨身を戀ふこゝろすなはち對
ふみ佛のまへ

み佛の光のうちに生かされつまもられてある
身とおもはず

あなかしこ三世にわたる業障をのぞきたまふ
といふにさからふ

み佛にみちびかれゆくたしかさに猶まどひつ
何をもとむる

人の世のよしなしごとにかゝづらひ斯くても
往くかみ佛のみち

人の世のまよひのまゝにまよひつゝいよゝ戀
ほしき南無阿彌陀佛

この身これ必墮無間と聞くからに彌陀の悲願
を身に邇く知る

墮地獄のわれと知るからいよいよに彌陀の淨
土は展かれてあり

南無歸依佛こゝろ素直に生きてゆく道をひら
かせ給ふかしこさ

み佛の光ぞ徹れくるしさの底にはあつ心ゆる
がす

病み喘ぐ中にもおもふ念佛に大きな力のわきく
ることし

わがこゝろ大盤石の如くなり大み恵みに力あ
ふれて

母と子と生かされてゐるよろこびの胸に佛の
ひかり射し來ぬ

み佛のみむねにかよふ念佛とつゝしみまうす
このあけくれを

み佛を慕ひまゐらすさびしさに木枯の夜を香
たきてをり

歳暮陳思（五首）

わがやまひ心なげかすしかすがに無爲に暮れ
ゆく年は惜しみつ

いくさするみ國にありて無爲にわがくれゆく
年の悔ぞつのりつ

年賀狀かゝぬときめて大年のこゝろ落ちつく
わびしさに居り

虚しさは二十五年をつひにわが病み永らへて
ありにけること

いのちあまた大みいくさに消ぬるとき病むつ
れづれをわがかくちたる

昭和十五年

皇軍は全支を壓しつゝちはやふる神つみ國の
春は明けたり（大捷の春兵籍なき身を愧づ）

勝いくさつゞくる國の日の御旗かゝげて仰ぐ
初春の空

はゝそはが雑煮煮る間をつゝましきこゝろと
なりてわがありにけり

いくさするみ國にありてあたゝかに雑煮祝ぐ
なるかしこさに哭く

徒食しつゝ雑煮祝ぐ身の端然と袴をつけてわ
が坐しにける

穩にわれら春を迎へつゝいくさする友への文
に筆初めにけり

花たえて久しき部屋にこもりゐつおもふこと
みなすさべることし

底冷えてくだちゆく夜を梟鳴く外の面は雪に
ならむとすらむ

やまひやゝ癒ゆるとおもふ日を晴れて朝より
外に春の鳥鳴く

玻璃戸越しさす日ぬくとき午下り春めくこゑ
に鳴くは何鳥

をちさんと子ろに呼ばれて面はゆさ返事すぐ
さま聲に上らぬ

をちさんと呼ぶるゝ齡ぞかへりみてわれに仕
事といふもののなき

をちさんと呼びたる子ろのつらにくゝ返事も
せずにとぼけゐたりき

恥多き身に思ひおよぶいよいよにをちと呼び
たる子のつらにくし

子ろの目にはすでにをぢさんに見ゆるならし
病みて起ち得ぬ身をぞ歎かふ

かくて子ろにをぢと呼はるゝ齡おおいにといたらむ
とする身の無爲をおもふ

自 嘲 (十首)

國とぞりたゝかふ秋ぞいさゝかのつとめもな
さず病める身を愧づ

何がため世にながらへてあることぞ病めるい
のちをわれとさげしむ

まことわれ凡下の身なり然りとて人さげすめ
ば怒り出づるもの

一應は凡下の身としうべなへどこのよしあし
あげつらふもの

わがわれを凡下とおもふそれさへやさかしら
ぶりて強いて思ふもの

白雲を戀ひつゝ往かむたまきはるいのちのみ
ちの一すぢよ照れ

まくらべに友らきたりていふ聞けばそれぞれ
に末の見込たてるらし

妻とる話職業の話は病むわれに縁とほくして
かかはりもなき

妻とる話のつひに子までに及びけるこの友ら
みなのだみ持つらし

つひにかもわれには妻のあらざらむ十有九年
病みて起ち得ず

廢兵となりし友に (二首)

己が身には傷は負ふともものとせずたゝかひ
とほしたる君のすがたか

國のためいのちさゝげて悔いざりしますらを
ぶりを君に見るべき

秘 戀 抄 (三十五首)

— A子に捧ぐ —

春は花今をさかりのせつなさに耐へむとしつ
つ涙垂りたり

下ごゝろ戀ふるわが眼をみるひとの淨きひと
みに氣おされむとす

下ごゝろ深くおもへるものゆゑによそよそし
くも君にふるまふ

なつかしくやがてさびしも君とふたり黙もくふか
くあればたへられなくに

わが母に心ゆるしてしたしくもふるまふ君を
みるが笑ましさ

病みあへぐわがまくらべに寄りそひて君はひ
とみをぬらしたまひぬ

男の子われ戀のなみだはさにづらふ君ゆゑに
こそ知りそめしかも

はかなごとゆめにみるに似てうるむ瞳の君ゆ
ゑにこそ戀ひ瘦すわれは

身のまはりをとめはさには見知れども玉の緒
かけて戀ふは君のみ

よそごとをおもふいとまもなきまでに君がこ
とのみ胸を占めたる

わかれの日せまるゆゑかも君おもふころは
げしくなりまさりつゝ

花菜咲く野らに佇てばひたぶるにわかれがた
なきおもひぞ吾する

山こみちもとほりくればひとりなるころに
ふれて晝の月あり

なぎきつゝ暮れゆく空や裏庭のひともとざく
ら咲きこぼれたる

春の星うらなつかしくおもかげにたちくる君
を人に知らゆな

身に泌めて君をおもはむ風ぬくき庭面の間に
蛙鳴きつゝ

今にしてかへりみすればわが戀は十七のところ
ゆ根ざそめしか

わが戀はこゝろにふかく常秘めて君がさきは
ひ一生いのらむ

すくやけく職業もちなばひたむきのわが戀こ
ころ明かさなむもの

まづしくして病みつぐからに魂こめし戀にし
あれと言にあかさず

吾が戀は人には告げそ止み難きこゝろもふか
く内にまもらむ

わがいのちかけし戀なりしかはあれど病める
身ゆゑに明かしかねつも

病める身の戀ははかなし家をめぐりもろ木の
花の咲きにけるかも

ますらをのひたぶる心傾けて戀ひ哭くわれを
君知らざらむ

かくばかり戀しきものをわがやまひ癒ゆる日
知らぬさだめなりけり

わすれむと耐へつゝもとな春の日のためいき
のみぞもれもこそすれ

ふるまひのうつけを母のいふまでにわれせつ
なくも君に戀ひつゝ

遠蛙なやましき夜ぞつひにかもわが戀ふる人
を母に洩らしつ

眞少女をおもひつめつゝ病む子かとわが手をと
りて母泣きましぬ

天地の神もあはれめたゝかひの最中^{まなか}に知れる
戀にありとも

われかつて戀に死ぬるをわらひしが今にいた
りてうべなはむとす

胸ふかく君を戀ひつゝわが宿世つひにさびし
くひとりなるべし

ひとりなるいのちのみちをあきらめのこゝろ
さやかにゆかむとぞおもふ

たまきはるいのちのかぎり戀ひやまじ死にて
のちも戀らむわれは

ひと知れず戀のなげきに哭く時し花ちらす雨
ふりいでけむ

別 離 (二首)

十有九年住み馴染みたる山代温泉より去らむとして
しんしんと青葉にしみる日のひかり見つゝほ
けゐてまぶた濡れ來ぬ

これの湯にひたるも終かあまたゝび浴みあま
つさへ飲みにけるかも

わかれにと訪ひ來る人らみな泣くや耐へられ
なくに去りゆかむ身は

正木鴨大人よりの招宴にまかりて (二首)

わがためのわかれの酒か松花の粉に吹く風を
見つゝもだしぬ

はじかみを噛みつつひにわかれなるなんだに
たへてゐたりけるかも

送別歌會席上詠（一首）

いつの日に相會ふ友かつどひつゝわがさびし
さは極まりにけり

新友Hに（一首）

秘めし戀すでに君知るかくばかりわれを知る
君と別れがたなき

安之居に土田實・通子御夫妻を訪ふ（一首）

朝ゆうべ松のこゑの聞き住みて藝術たぐみのみに
はげみますらし

つきつめてやまひをなげくことまれにつひに
消ぬるきほひごゝろか

なにこともあきらめゆかむとおもひつゝわれ
なにこともあきらめられず

誰が許に嫁ぐべきやは氣をつよくやまひに克
てと君は言ひたり

ひたむきにわれに寄りくるをとめ子の一すぢ
ごころときにおそるゝ

君がこゝろわがものとなりぬいきのみのぞみ
たくましく起たさるべからず

あまたたり見送りくれし人どちに禮す言にい
ですわかれし（離別抄）

わがおもひ言葉にならず二十年のふかき馴染
をせちになげかゆ

さらぬだに別れかなし姉が泣けばわが挨拶
もしどもどろに（丘子姉に）

北陸の山河はあはれ去るわれに夜闇深うして
汽車ひたはしる

旅 愁

山河居に川田順先生を訪ふ（六首）

先生に會はまく來つるこの町の板塀つゞき晝
の閑かさ

わがこゝろけしくもをどる邸の前順先生の名
は見たりけり

氣をかねてわが押ししベルおどおどと先生邸
の内にひゞかふ

たゞにわが衣紋つくろひゐたりけり應接室に
待つ間ひとゝき

ひそやかに古埴輪達並み立てる應接室に待て
ばつゝまし

ねもごろなる順先生のもてなしに病む愚痴さ
へつひに洩したる

尾道・濱根家（五首）

この部屋に通るすなはち裏庭にま日照らひゐ
て日照草の花

梅雨の空おぼおぼ昏れて庭小舎にくぐみ鳴く
なり傳書鳩らは

いねをれば蒲團の襟に舞ひ下りてこれの小鳩
はわれにしたしむ

水打てるヒマラヤ杉に風いでゝゆうべすすし
き庭の籐椅子

いく日この部屋に起き臥し江漢の達磨の軸は
眺めあかぬも

太田家（一首）

中學を目ざす啓義あどけなしわれと共寝をし
つゝあまゆる

村上鼎博士に（一首）

歌の本あまた並びて先生の診療室はしたしみ
ふかき

南無大師遍照金剛西國寺土塀に性のなやみ書
きあり（らくがき）

浄土寺の峰の薬師に登り来て見はるかすなり
瀬戸の海原

岡山・後樂園（一首）

公園の芝原廣みま日てらひたゞに閑かにひと
り佇ちゐつ

法妙寺青葉かげに近松のおくつきどころ苔む
せりけり（大阪にて・門左衛門の墓）

かくてわがいづちに果てむいのちぞも旅より
旅を母とさすらふ

歸郷旅愁

二十年ぶりに函館へ歸りて（十六首）

わがこゝろ愁を持てる旅なればみちのくの空
車窓にくもりつ

わが汽車の窓の洩れ灯に土手つゞき月見草の
花咲きさかりたる

わが服装のまづしさはおもへ恥らはず二等船
室に寝そべりにけり

甲板にいづるすなはちあれよあれわがふるさ
との山見えきたる

ふるさとの山に對へばおもふこと言葉にたえ
て涙にじみ來

二十年ぶりに來は來つれども世に起てぬ身こ
そなげけふるさとの山

啄木の墓への道をたもとほり涙垂り來つたん
ぽゝの花

ふるさとに知れる人なしたんぽゝのすがり花
咲く道とほりつゝ

ひとりのみ啄木の墓にわが來ればこゝろにし
みて老鶯の鳴く

君のごとわれもさすらひて死ぬるならむ啄木
の墓に花たてまつる

啄木の墓前に佇^たてば哭かゆなり立待岬の潮騒
の音

あが生れし家のあたりぞかなしけれ青柳町の
名のみのこれる

ふるさとの汐見の坂にわが佇^たてばメソヂスト
の鐘鳴りいでにけり

ふるさとに來ながらかなし驛^{はた}前の旅籠^こ屋^やにわ
が二夜寢にけり

ふるさとは二十^{はた}年^{とせ}ぶりにかへり來つゝ旅愁^{はな}し
みじみ湧きにけらずや

さらばさらばふるさとの山駒^{やまこま}ヶ嶽^{たけ}まつしろに
して汽船^{ふね}去らむとす

昭和十五年八月十五日印刷
昭和十五年八月十九日發行

(非賣品)

編輯者 石川縣江沼郡山代町字山代
兼 雜木 社
發行者 代表者 正木 哲 郎

發行所 石川縣金澤市上石引町八一
葦 附 社

印刷所 石川縣金澤市高岡町九〇
明治印刷株式會社
代表者 高橋 覺 吉

408
138

終

